

## オーディオ実験室収載

### EQ カーブ対応トーンコントロールの調整(16)(HP 収載) －Marantz7による調整(5)－

#### 1. 始めに

前報(15)に引き続き、Marantz7によるトーンコントロールの調整の効果イコライザーカーブ毎に詳細を詰めていきます。

#### 2. トーンコントロールの調整方法

次の再生経路を設定します。

##### 再生経路 1

LINN LP-12→ZANDEN Model 120 (EQ 可変) →Brooklyn DAC+

\*ZANDEN Model 120 の EQ カーブの最適条件で再生する。

##### 再生経路 2

LINN LP-12→ZANDEN Model 120 (RIAA 固定) →Marantz7 (ライン入力)

→Brooklyn DAC+

\*ZANDEN Model 120 は RIAA に固定し、Marantz7 のトーンコントロールの調整を行い、要時 Brooklyn DAC+で位相反転を加える。

##### 再生経路 3

Thorens TD124→My Sonic STAGE 1030→Marantz7 (フォノ入力) →  
Brooklyn DAC+

\*Marantz7 は RIAA でトーンコントロールの調整を行い、要時 Brooklyn DAC+で位相反転を加える。

音源は EQ カーブの異なるアナログ盤を準備します。今回は DECCA カーブと思われる次の盤を選択します。

##### LONDON CS 6366

ベートーヴェン ピアノソナタ 18 番  
バックハウス

##### LONDON KIJC 9180/84

ワーグナー ワルキューレ  
ショルティ指揮ウイーンフィル

#### 3. トーンコントロールの調整結果

再生経路 1 では、ベートーヴェンのピアノソナタ 18 番は、DECCA、R、第 4 時定数 Mid で再生し、バックハウスの弾く、おそらくはベーゼンドルファーのどっしりとし

た力強いピアニズムが響きます。

ワーグナーのワルキューレは、DECCA、R、第4時定数 Mid で再生し、オーケストラの分離もよく、押し出しもあり、ソリスト達の定位もよく歌唱が明晰です。

再生経路 2 では、ベートーヴェンのピアノソナタ 18 番は、RIAA、N、第4時定数 High で再生し、Marantz7 のトーンコントロールの Treble を 1 ノッチ上げ、Bass を 1 ノッチ下げ、Brooklyn DAC+ で位相反転することにより、高域の打鍵は鋭く、低域はしまりがでて、音の曖昧さが解消します。こういった対応をとらないと音の焦点が定まりません。

ワーグナーのワルキューレは、RIAA、N、第4時定数 High で再生し、Marantz7 のトーンコントロールの Treble を 1 ノッチあげ、Bass はフラットでもよいかなと思われますが、1 ノッチ下げ、Brooklyn DAC+ で位相反転することにより、オーケストラの切れも押し出しもよく、ソリスト達の定位もよく歌唱が明晰です。こういった対応をとらないと、音に曖昧さが残り、ソリスト達の歌唱がぼやけます。

再生経路 3 では、ベートーヴェンのピアノソナタ 18 番は、RIAA で再生し、Marantz7 のトーンコントロールを再生経路 2 と同様にし、Brooklyn DAC+ で位相反転することにより、打鍵の力強さがありながら、音の柔らかさもでできます。

ワーグナーのワルキューレは、RIAA で再生し、Marantz7 のトーンコントロールを再生経路 2 と同様にし、Brooklyn DAC+ で位相反転することにより、ホルンやトロンボーンの迫力が増し、全般的に真空管のフォノステージらしさが感じられます。

#### 4. まとめ

イコライザーカーブが RIAA でない盤を RIAA で再生した場合の違和感を Marantz7 のトーンコントロールを調整することで、一定程度カバーすることができました。

以上